校内別室指導支援員を活用した取組について

不登校児童の状況

対象児童は、集団への参加や対人関係の構築に困難さを感じて不登校になった。行事には参加したり、担任と学習や家庭での様子を話す機会を設けたりすることで、学校とのつながりは継続していた。校内別室ができたことで、当該児童の思いや家庭の願いを、より具体的に支援することができ、登校日数が増えている。

具体的な取組

○居場所の提供

校内別室を設置し、教室に入室が困難な児童の居場所の提供を行っている。児童によっては、別室で過ごす、気持ちが落ち着いてから教室に向かうなど、個に応じた対応を行っている。

○学習支援

担任が指示した課題や、タブレット端末を活用したドリル学習などに取り組めるようにしている。校内別室指導支援員は、学習の様子を見守ったり、助言したりしている。

○情報の共有

週１回の生活指導連絡会で状況を共有する機会を設けている。別室で過ごした様子は、支援員が記録し、全教員が把握できるようにしている。また、利用前には担任や校内別室担当教員が窓口となり、保護者と面談を行い、当該児童の気持ちや保護者の願いを把握し、支援に生かすようにしている。

○関係機関との連携

ＳＣとの面談や、必要な場合はＳＳＷ、教育支援センターや教育相談所等の関係機関につなげている。ＳＣとは、該当児童だけでなく、その保護者と面談を設定している。また、教育相談所につなげることで、漠然とした不安以外の要因も考えられるケースもあり、当該児童の支援に生かしている。

成果

校内別室ができたことで、「居場所ができた」という安心感から、不登校児童の登校日数や学校で過ごす時間が増えた。また、校内別室指導支援員が教室まで付き添うことで、学級に参加できる児童も増えた。

課題

未然防止のための魅力ある学級づくりや、年度が替わる際の情報の引き継ぎがスムースに行えるようにする必要がある。

早期対応と校内別室指導の重要性について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校３年生の２学期から欠席が増え始め、集団の授業に入ることができなくなった。進路実現に向けて、学習への意欲が高く、学級担任から校内別室登校を当該生徒と保護者に勧めた。10 月から毎週１日登校し始め、学級担任、不登校担当教員、校内別室指導支援員が連携して支援を行った。

具体的な取組

○担任からの支援

登校を渋り始めたので、早期に面談を実施した。集団には入れないが個別対応ならば登校できることや、学習意識が高かったことや、早期に気付けたことにより、別室指導につなげることができた。登校後も毎週配布物を渡し、進路の話をするなど支援を行った。

○進路指導の実施

進路指導として、作文や面接の練習等を行った。また、願書の書き方や進路日程などの確認も、担任が来室して支援を行った。

○校内別室指導支援員の対応

校内別室指導支援員は、生徒が学習したい教科に沿って自学自習が行えるよう、学習計画を立てたり、学習内容の支援を行ったりした。また、休み時間等は、家庭での様子を聞くことや、学校行事への参加を促すこと、進路などの悩みの相談などの対応も行った。

○学年の教員とのつながり

卒業アルバム写真の撮影については、担任だけでなく、部活動の顧問やアルバム担当の教員が来室時に声をかけ参加することができた。

卒業式についても、学年主任などの声かけにより、午後の部の卒業式に参加することができた。

成果

教職員と保護者が連携して、早期に適切な働きかけを行うことの大切さを、教員間で共有した。また、教育相談部会を中心とした校内体制の充実を図ることで、ＳＳＷや教育相談所との連携を含めた支援策を協議することが日常化し、組織対応が充実した。

課題

別室指導を行う部屋と特別支援教室が兼用のため、専用の場所を確保することが今後の課題である。

校内別室指導支援員と連携した支援について

不登校児童の状況

対象児童は、第４学年１学期まではほとんど欠席することなく登校できていたが、２学期から少しずつ朝起きることができない状況が続き不登校となった。

登校した際に、校内別室で学習を進め、休み時間には、少人数の友達と交流している。

具体的な取組

○職員間の情報共有

長期的に活用する児童と短期的に活用する児童がいるため、毎日の様子を校内別室指導支援員から管理職に報告している。その状況を、担任と情報共有して具体的な支援を検討している。職員打合せなどを活用し、児童の状況を職員全体で共有している。

○見通しをもつ工夫

当該児童が、校内別室で学習する内容や学級での授業に参加する時間を自分で決め、見通しをもって一日をスタートすることができるよう支援している。そのために、担任と校内別室指導支援員は、事前に学級の一日の予定や学級での児童の様子等の共有を行っている。

○活用ルールの確認、友達との交流

校内別室を使うルールを当該児童、保護者、担任と面談で確認し、校内別室指導支援員に面談での様子等を共有している。

また、学級復帰に向けて、休み時間には校内別室が在籍学級の友達との交流の場となるよう、担任と校内別室指導支援員が連携を図っている。

○保護者との情報共有

当該児童の送迎のときに、管理職、担任、養護教諭など多くのつながりをつくり、学校での様子、家庭で頑張っていること、学校行事への参加方法など随時相談し児童理解に努め、積極的な連携を図っている。

また、ＳＣとの面談を設定し、児童と保護者のサポートの充実を図っている。

成果

担任と校内別室指導支援員が連携し、個別の支援を行うことで、当該児童が安心して学ぶことができる場として校内別室を活用している。自分で過ごし方を決めることで、見通しをもち、自立した過ごし方ができている。

課題

全ての学習を、教室と同じように進めることはできず、不登校児童への学習支援の充実を図っていく。

校内別室指導支援員の活用による、不登校生徒に寄り添った支援

不登校生徒の状況

対象生徒は、１年生の 10 月末から欠席や早退が増えた。ＳＣとの面談を行うなど支援していたが、３学期に入り欠席が更に目立つようになり、週３日程度欠席していた。２年生の４月当初は週１日程度の欠席で、登校時は教室で授業を受けていたが、徐々に保健室利用や早退、欠席が増え始め、５月中旬からは、校内別室指導を利用している。

具体的な取組

○全校生徒の情報収集

年度当初、校内別室指導員が、全校生徒の実態を把握するため、過去の教育相談関連の記録を確認し、支援が必要な生徒について担任への聞き取りを行った。また、担任と校内別室指導支援員が連携を図るために、生徒に寄り添った対応について検討した。

○支援会議での対策方法を受けて

受容的な姿勢で当該生徒と関わり、生徒の自己肯定感の向上に努めた。また、生徒の社会性や人間性を伸ばすために、教職員との信頼関係づくりを中心とした、楽しい学習支援とコミュニケーションに努めた。

○校内研修

不登校生徒の理解と対応に関する校内研修を行った。不登校生徒への支援は、学校に登校することが目標ではなく、社会的な自立を目指すということを強調し、共通理解を図った。研修後のアンケートでは、教員の不登校生徒への理解が深まり、受容的な姿勢での関わりが期待できる結果となった。

○生徒・教員用活動記録による情報共有

校内別室利用の生徒の振り返りシートを活用し、担任との情報共有を行った。また、校内別室指導支援員が、学習内容や生徒の様子、生徒が話した内容について記録し、担任や学年職員と情報共有を行った。

成果

校内別室を利用することにより､継続して週２日程度登校することができ、不登校にはならなかった。別室指導支援員と良好な関係を築くことができ、校内で過ごせる時間が少しずつ増加した。

課題

校内別室での支援員が毎日異なるため、各教科の系統的な学習支援を充実する必要がある。

個に応じたオンライン支援

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校２年生のときに対人関係への不安から欠席が目立つようになり、不登校状態が継続した。対人関係の形成が困難なことから精神面での負担が大きくなっている。過去のトラブルが原因で、２年生の後半から教室に入れない状態が続いた。また、大勢が集まる環境に不安を抱いている。

具体的な取組

○校内別室での対応

利用する生徒一人一人の状況をアセスメントをして的確に把握し、個別指導を行った。学習課題のサポートや、興味・関心に基づいた活動を一緒に行い、利用する生徒の自主性を育めるよう、自身で考える場面を作った。

○個別学習の時間の設定

一人１台端末を活用した校内別室と教室をつなぐ、オンライン授業を行った。興味のある教科等の授業を選択し、生徒が持参した課題にも取り組めるよう、個別の学習支援を行ったことで、意欲的な活動が見られた。

○別室でのテスト受験

教室に入りづらい生徒に対して、別室でのテスト受験を実施した。教室に入室が困難な生徒の心の安定につながった。また、教室内で落ち着かなくなってしまったときに、別室で気持ちを落ち着かせられるよう対応することもでき、個に応じた支援の実施につながっている。

○オンライン卒業式練習

卒業式の流れや座席位置が分かるように撮影位置を調整した。行事等を一緒にすごす気持ちを共有することができた。

見通しをもてるようにして、参加してみようという気持ちが生まれた。

成果

教室環境を整備し、生徒の悩みを全教職員間で共有することで、生徒が安心して過ごせる居場所をつくることができた。また、ＩＣＴの活用による、個に応じた支援をすることで、どこにもつながりのない生徒を０人とすることができた。

課題

生徒や保護者等全体に対し、別室指導について周知しているが、十分に情報が伝わっていない状況であるため、更なる働きかけが必要である。

不登校傾向の生徒への別室指導による支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校在籍時、学芸会の練習中に人前で嘔吐したことが原因で人前に出ることに不安を抱いており、登校することができなくなった。中学入学当初、放課後登校をしていたが、現在は、午前中に校内別室を利用している。

具体的な取組

○継続した登校を促すための工夫

当該生徒が安心して登校できるように、生徒の登校時間や休み時間と重ならないように開室時間を９時 30 分から 12 時 30 分までとした。また、登校を継続させるために週４日開室している。生徒の実態に応じて目標を細分化し、登校回数を増やすように促した。

○学習のつまずきの解消

不登校対応加配教員や校内別室指導支援員は、生徒が持参した自習課題の支援を行った。小学校のときにつまずいた学習内容の復習に取り組む生徒もいた。

原則一対一の個別指導で、きめ細かな指導を行った。

○オンライン授業の実施

一人１台学習端末を活用し、興味のある教科の授業をオンラインで受けられるよう環境整備を行った。また、アプリケーションを活用し、リアルタイムで教室の学習活動に参加できるようにした。

○コミュニケーションの場の設定

担任、不登校対応加配教員、校内別室指導支援員のほか、ＳＣや用務主事の職員との関わりを意図的に設定した。また、社会科への関心が高い生徒に対しては、社会科教員３人と懇談する時間を設定する等、コミュニケーションを取る機会が増えるよう工夫した。

成果

年度当初、校内別室への登校が週１日だった生徒が、週２、３日登校できるようになった。また、オンライン授業の導入により、学習意欲が向上し、定期考査で多くの教科に取り組めるようになった。

課題

スモールステップで不安を軽減させて、登校が安定するよう働きかけを行う。また、保護者に対し、医療や臨床心理士との連携を提案する。